

## 滅びる者を惜しむ神

ヨナ書4章

ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか。(11)

ヨナの宣教によつてニネベの人々が悔い改めたのを受けて、主はニネベの町を滅ぼすことを思いとどまられました。ところがヨナは自分の預言したことが成就しないことを不快とし、憤りをもつて神に抗議します。何と独善的で狭い心でしょう。

ヨナは町の成り行きを見守ろうとして町が見渡せるところに座します。主は暑さに苦しむヨナのためにとうごまの木を与えられました。ヨナは日陰を与えてくれるその木を大変喜びましたが、次の日になるとその木は枯れていました。するとヨナは非常に落胆し、死を願いつつ「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」(9)と主に訴えました。主はヨナを諭すように語られました。「あなたは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは……」と。ヨナがたつた一本の木を惜しむのであれば、主がニネベの町の人々が滅びるのを惜しむのは当たり前ではないかということです。全世界の主なる神は、罪人たちが滅びるのを喜ばれる方ではありません。どんな国の人々であつても、罪のゆえに滅びることを決して望まず、救いを願つておられるのです。

わたしたちの心の内にもヨナがいませんか。わたしたちはもともと、主が「惜しい」と思つてくださったからこそ救い出された者たちであることを思い出そうではありませんか。